

答 大泉茂基は、すぐれた才能をもちながら、貧窮と病苦のうちに、その大成を見ずに病歿した、詩人版画家です。大正2年6月11日、柴田郡船岡〔現柴田町〕の素封家、大泉宗七郎の長男として生まれました。幼少の時母を失い、祖母と父の手で育てられました。父は内村鑑三に私淑し、熱烈なクリスチャンであったため、茂基も日曜学校に通うなどして、宗教的な雰囲気に触れて成長しました。そして、白石中学〔現白石高校〕に入ってから、詩作と版画に親しみ、山と音楽を愛するようになりました。蔵王にはよく登り、陸上競技部の選手となるほどのスポーツマンでもありました。しかし、20才前後の頃から試練の生活が始まりました。大宗と呼ばれ、仙南屈指の富豪だった生家の没落にあい、また肋膜炎をわずらって、東北学院文科を中退しなくてはならなくなったのです。けれども、この困難な時期に入ってから、他の多くの薄幸な天才達がそうであったように、茂基の詩と版画とは豊かな展開を示し始めたといわれます。茂基は、ダンテ・ヘルマン・ヘッセ・リルケ・ロマン・ローラン・ランボー・ニーチェ・ホイットマンなどの詩に学び、ゴッホ・ブラック・ルオー・中村彝〔つね〕・長谷川利行の作品に親しみ、生活苦に追われながら研鑽をつづけ、昭和24年に詩と版画の自家版「けやき」を出版しました。

昭和29年、船岡から仙台に転居し、仙台中央放送局の臨時雇で薄給を得たり、遂には東一番丁で屋台店を開業したりの苦しい生活の中で、茂基は版画の制作を続け、すぐれた作品を次々と個人誌の誌上や、個展で発表して行きました。しかし、その天才的な才能がようやく世の注目を集めてきたとき、不幸にも胃癌のため、昭和35年1月22日、国立仙台病院で46才の生涯を終りました。

資料 大泉茂基氏追想の記（村上淳、「日曜随筆」第67号の内）

文芸東北第2巻3、7号

非を非とする（相沢源七）

38. 名取春仲のこと

問 私は佐々木実由〔さねよし〕の子孫です。佐々木実由については「仙台人名大辞書」に次のように書かれていますが、その師名取春仲のことは、この辞書に全く記載されていません。仙北地方の何処だったか忘れたが、「名取春仲の碑」の前を車で通過したことがあります。いろいろ別の本でも調べていますが、どうしてもわかりません。名取春仲とは、どういう人ですか。

「仙台人名大辞書」『佐々木実由。筆道家。字は自光、羽黒派の修験(1)にして春龍専神道居と称す。名取春仲(2)に就て書道・天文・兵法等を学び、私塾を開きて子弟を教授す。慶応三年〔1867〕四月二十日歿す、享年六十三。』

答 名取春仲は、岩出山出身の神道家・歴史家・天文家であります。春仲は、宝暦9年〔1759〕名取屋の長男として生まれました。名取屋は戦国時代、名取郡高館に居城していたが、伊達氏に滅ぼされて、天正年中〔1573～92〕岩出山〔当時岩手沢〕に移り住み、名取屋と称して代々醸造業を営んできました。春仲の本姓は源、諱は敬純、通称を権右衛門といたしました。商家の子弟でありながら好学力が強く、その英才を認められて特に有備館に入学を許されました。業を卒えると仙台に出て、橋本春波の門に入り、神道・兵法の奥儀を究めたが、さらに、藤広則・殿村春辰に暦学を学びました。行くとして可ならざるはなく、春仲は天文・地理の学問にも通暁するようになりました。春仲の盛名は四方に高く、その学徳を慕って遠近から集まり師事する者多く、春仲はその教育指導に力を尽しました。現在、小僧部落の田の中に建っている春仲の碑が、御質問の中にある碑で、門人達が恩師春仲に対する謝恩の心を、今に伝えているものです。春仲は70才の時、京都に上って「三天九道北辰の奥秘」を講じたこともあるといわれます。天保6年〔1835〕6月14日歿、76才。「仙台一ノ関、盛岡及弘前藩ノ和算家ニ就テ」（林鶴一、「東北帝国大学東北数学雑誌」第16号〔大正8年〕の内）に『名取春仲ナルモノアリテ天文ニ熱中セント聞ケリ、春仲ハ其師ノ号春山、同門ノ号春湖ニ比較シテ該名取氏ノ号ナリシナランカ』とあり、また、東北大学附属図書館の蔵書中に「名取文庫」があります。

注(1) 「玉造郡誌」に『佐々木自光。新田夜鴉に住す、羽黒派修験にして天文・暦術・六法に通じ、教を名取春仲に受く、近郷の子弟を教育す。慶応三年没す。』とある。

注(2) しゅげん。羽黒派とは、山形の羽黒山の羽黒権現に奉仕した修験者。修験者とは修験道の修行者のこと。修験道とは、役小角〔えんのおつ〕を祖と仰ぐ仏教の一派であるが、日本固有の山岳信仰の伝承を濃厚に残している。護摩〔ごま〕を焚き、呪文〔じゅもん〕を誦し、祈禱を行ない難行・苦行を重ねて、神験を修得する。

注(3) 伊達氏の一門である岩出山伊達家の学問所。第4代村泰の時代、元禄4年〔1691〕二の丸の旧建物を用いて学舎とし、家中の子弟を修学させた。初め春学館と称したが、翌5年現在の地に移して有備館と改めた。その建物は学問所として領内最古のもので、清水道平が設計したといわれる庭園とともに、昭和8年2月28日、国の史跡及名勝に指定された。

注(4) ふじひろのり。天文家。通称彦六郎。蒼海と号す。その家貧窮をきわめたが、天文学を志し戸板黄海に学んだ。刻苦精励して学力拔群、同門にしてその右に出ずる者がなかったという。司天台〔天文台〕の星官に登用され、精緻な観測を続ける傍ら、後進の教育に努め、多くの秀才を輩出した。30余年の研究成果「天文測量志」は高い評価を集めた。文化4年〔1807〕12月25日歿。60才、北山資福寺に葬る。

注(5) 佐竹義根〔よしね〕。天文家。通称九吉、始め長倉義海と称した、春山・秋水また尾斎と号した。遠藤衛久・渋川敬也に天文・神道・兵学を学び、奥義をきわめ天文生に挙げられた。教を受けた門下生も多かった。明和4年〔1767〕閏9月20日歿、享年80、元寺小路

光円寺に葬った。

注(6) 大塚頼充〔よりみつ〕。天文家。善右衛門と称し、春湖また東嶽と号した。天文を佐竹春山に学び、宝暦10年〔1760〕悉く伝授を受けたという。名取春仲と同門だった。享和元年〔1801〕歿、70才、七北田村山ノ寺洞雲寺に葬る。

資料 岩出山町史上巻

39. 菅井梅関の墓はどこにあるのか

問 「仙台人名大辞書」によると、菅井梅関の墓は新寺小路生因寺にあることになっていますが、い
(1) (2)
くら探してもその寺は見つかりません。どこにあるのでしょうか。

答 菅井梅関は、天保15年〔1844〕1月19日、61才の時自殺し、生因寺に葬られました。ところが
(3)
この生因寺は明治維新後廃寺となり、隣の正雲寺に吸収されたのです。「仙台人名大辞書」(昭和
(4)
8年刊)の梅関の項は、梅関が生前親交のあった有名な漢詩人篠崎小竹〔しのぎきしょうちく〕の
(5)
書いた墓碑銘に基づいて書かれたもので、後の生因寺廃寺のことに及んでいません。墓域は荒廃するま
ま久しかったが、梅関愛好の有志が梅関会を組織し、昭和28年10月11日、正雲寺仏殿前西側中央に
改葬しました。したがって梅関の墓は生因寺にはなく、正雲寺にあったのですが、これも昭和48年
西郊葛岡墓園に移転してしまいました。

なお、梅関は、いわゆる「仙台四大画人」の1人であります。

(6)
注(1) 菊田定郷著。昭和8年発行。1万5千余名を収録し、1,500ページに近い労作。多少批判
もあるが、出所を明示して主観を入れていない点が長所で、現在郷土人名事典としては唯
一のものである。

注(2) 本願山と号し、浄土宗、寛永13年〔1636〕開山で、堂宇宏壯を極めていたというが、宝
永5年〔1708〕の火災で全焼し、その後仮堂を建立して明治維新に入ったが、隣地正雲
寺の管理に移して廃寺となった。

注(3) 画家。諱は岳、東斎後に梅関〔梅館と号した時期もある〕と号した。初名は智義、字は正
剛、通称は善輔、後岳輔と改めた。幼時から画を好み、根本常南〔周防の画人、通称匡輔、
常南また蟻斎と号した。南画山水にすぐれ、諸国を周遊して、寛政・文化の頃仙台に来て
いる。梅関が学んだのはその時である。〕に師事した。常南は梅関の画才を認めて「頭角
すでに現わる、必ず為す所あらん。」といった。やがて江戸に上り谷文晁に学んだが、程
なく京都・大阪に移って刻苦画技を磨いた。偶然長崎に住む清国人江稼圃の存在を知った